

11 月第 2 週の礼拝説教

■日 時：2024 年 11 月 10 日（日）10：30～11：30 降誕前第 7 主日礼拝

■説 教： 保科けい子牧師

■聖 書：新約：マタイによる福音書 3 章 7～12 節（新約 P4）

■説教題：「わたしの後から来る方」

■讃美歌：12（とうときわが神よ、）
457（神はわが力、わが強き砦、）

毎回のようには申し上げていますが、2024 年度は、教会暦で特別な日を除いては、主日礼拝の聖書箇所は、日本基督教団の聖書日課の中から福音書を取り上げてお話ししてきました。ですから、本日の聖書箇所もマタイによる福音書 3 章 7 節から 12 節を選んであります。ところが、先ほど司式者に読んでいただきましたが、この取り上げ方はなんとなく中途半端な印象を受けられたのではないのでしょうか。マタイによる福音書は、1 章から 2 章は主イエス・キリストの誕生に関わるものが記されています。それは、皆さんもご存じのように、クリスマス前後に何度も読まれている箇所です。そして、3 章になると、「1 そのころ、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え、2 『悔い改めよ。天の国は近づいた』と言った。3 これは預言者イザヤによってこう言われている人である。『荒れ野で叫ぶ者の声がする。「主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ。』」と書き出されています。この箇所で、洗礼者ヨハネが「現れた」ということがきちんと記されているのです。それは旧約聖書のイザヤ書 40 章で預言されていたことの成就である、とマタイによる福音書の著者が考えていることでもあります。そして、5 節、6 節では「5 そこで、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、6 罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。」と、当時の状況を説明しています。そのように、マタイによる福音書の 3 章には、主イエスが教えを宣べ伝え始めるに先立って現れ、その準備をした洗礼者ヨハネのことが記されています。そして、そのヨハネのメッセージの中心は、2 節にあるように、「悔い改めよ。天の国は近づいた」という悔い改めの勧めであったのです。この洗礼者ヨハネのことは、四つの福音書全てが記しています。しかし、ヨハネが「悔い改めよ。天の国は近づいた」と語ったと記しているのは、マタイによる福音書だけなのです。ヨハネのこの言葉は、少し先の 4 章 17 節に記されている主イエスの言葉と全く同じです。洗礼者ヨハネは「悔い改めよ。天の国は近づいた」という主イエスと全く同じ言葉を語ることによって、主イエスの道備えをしたのです。そのような背景があって、本日の聖書箇所の場面は描かれています。

ところで、洗礼者ヨハネのもとに来て罪を告白し、洗礼を受けようとした人たちの中には、ファリサイ派やサドカイ派の人々もいました。彼らは当時のユダヤ人たちの宗教

的な指導者でした。ファリサイ派は「律法学者」とも呼ばれていて、人々に神の掟や戒めを教え、それを守る生活を指導していたのです。サドカイ派はエルサレム神殿の祭司たちを中心とする人々でした。これらの人々がヨハネのところに来て洗礼を受けようとしたのは、当時の人々がこぞって押しかけているヨハネから受洗することによって、さらに自分たちの権威付けをしようという思いがあったのかもしれませんが。ところが、ヨハネは彼らに非常に厳しい言葉を投げかけました。7節の後半には「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか」とあります。「だれが教えたのか」と問いかけていますが、それは、ヨハネ自身が、「罪を告白して悔い改め、その印である洗礼を受けることによって罪の赦しを与えられる」と語ったのです。ですから、ファリサイ派の人々にしても、サドカイ派の人々にしても、旧約聖書との関連を前面に出して語るヨハネの教えを伝え聞いて納得できたからこそ、洗礼を受けにやって来たのでしょう。ところがヨハネは彼らに、「おまえたちは神の怒りを免れることはできない」と語ったのです。何故できないのか、その理由が8節に記されています。彼は「悔い改めにふさわしい実を結べ」と言っています。ファリサイ派やサドカイ派の人々は、聖書には非常に精通していましたから、そこで語られている悔い改めの必要性については十分に知識として持っていたはずですが、けれども、悔い改めにふさわしい実を結んでいないのです。だから罪の赦しを得ることができないのです。これはファリサイ派やサドカイ派の人々のみに語られていることではありません。私たちにも問われていることです。そもそも「悔い改めにふさわしい実を結ぶ」とはどういうことなのでしょう。私たちが日常生活の中で、「悔い改める」という場合、悪いことをしてしまったのでそれを反省し行動を「改める」というように考えてしまいがちです。けれども、「悔い改める(メタノエオー)」という言葉の本来の意味は「心の方向転換」であると言われています。ですから、ヨハネがここでファリサイ派やサドカイ派の人々に語ったのは、あなたがたは善い行いなどの業が足りないから悔い改めよ、ということではありません。そもそもファリサイ派やサドカイ派の人々は、神の掟である律法を一般の人々よりもはるかに厳格に守って生活していたのですから、律法に照らし合わせての善い行いというならば、十分に悔い改めにふさわしい実を結んでいたはずですが、しかし、その行動や生き方の方向が、本当に主なる神様に向いているか、という深い意味での悔い改めの必要性をヨハネは問うていたのだと思います。私はこの箇所を読む時、いつも思い出されることがあります。それは「罪とは何か」ということを何人かで話していた時のことだったと思います。「罪とは的外れという意味です。つまり、本来の神様の求められる目的から外れて行動しているということです。神様に向かって歩まなければいけないのに、異なる方向にそれてしまっているということです」と説明してしましたら、ある方が「そんな甘い考えではだめだ」と怒鳴り出しました。しかし、そうでしょうか。「私たちが本来あるべき姿から外れてしまったとき、それに気づかせてくださる方がいる。そして、気づくことができたなら、心を方向転換して本来の方向へと新しく歩みだす」、それは決して、甘い考えでもたやすく

実行できることでもありません。だからこそ、私たちにいつも求められているのは、そのような罪の許しを求めて祈ることと、本当に悔い改めることなのではないでしょうか。

9節にまいります。「『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言うておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる」。アブラハムは、主なる神の民であるイスラエルの最初の先祖であり、「信仰の父」と呼ばれています。ですから、「我々の父はアブラハムだ」というのは、自分たちはアブラハムの子孫であり神に選ばれた民だ、という誇りを語っている言葉なのです。特に、ファリサイ派やサドカイ派の人々は、ユダヤ人たちが持っているそういう選民意識、自分たちは神に特別に選ばれている、と誇る思いを強く持っていたのです。私たちはユダヤ人ではありませんから、「我々の父はアブラハムだ」と言うことはできません。しかし、私たちも別の仕方と同じ間違いに陥ってしまうことがあるのではないのでしょうか。つまり、神のみ心に従って善い行いに励み、より正しい者となろうと努力することが信仰であり、そういう自分の信仰の努力によって救いを得ようとしている、その信仰の努力の一つとして「悔い改め」を位置付けていることがあるのではないのでしょうか。そこでは、悔い改めることは自分の罪を認める謙遜さを持つこととして認識されています。自分の罪を認める謙遜さを持つことによってますます信仰深い正しい者、立派な者になろうとします。つまり悔い改めも信仰の努力の一つになっているのです。そうすると、自分はこのように悔い改めることができるようになったと心の中で密かに誇るようなことが起るのです。けれども、私たちは悔い改める者を赦して下さる神の恵みによってこそ救われるのです。その救いを求めて神の前に立ち、罪を告白してひたすら赦しを求めることこそが悔い改めなのではないのでしょうか。ヨハネはそういう悔い改めの印として洗礼を受けました。そして、来たるべき方によって神の支配が確立することを示しました。その天の国に生きる者となるために、悔い改めを求めたのです。しかも、その悔い改めにふさわしい実を結ぶことをも求めました。そして10節では「斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる」と語りました。また12節では、「わたしの後から来る方」が、「手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる」のだとも語りました。つまり来るべき主によって裁きが行われ、救われる者と滅びる者とが分けられることを語ったのです。ここまで読んできたときに、11月10日というこの日は、教会の暦ではどこに位置しているかを、改めて考えさせられました。今年は、12月1日の主の日から待降節に入り、教会の暦では新年になります。そうすると、今はちょうど一年の締めくくりの時期ということになります。その時に、洗礼者ヨハネが「わたしの後から来る方」を示している聖書箇所を読む意味は何か、ということを考えさせられます。ヨハネのバプテスマは悔い改めのしるしでしたが、主イエス・キリストは「聖霊と火とのバプテスマ」(3章11節)によって、私たちの心を内側から造り替え、神への方向転

換を導いてくださいます。そのような一年の最後の締めくくりの日々を過ごしたいと思
います。

※立川教会では、11月17日（日）午後1時から、礼拝堂を会場にして、カンテレ（フ
ィンランドの伝統楽器）の演奏（はざた雅子氏）とそれにまつわるお話（橋本ライヤ
姉）の会が開かれます。入場は無料です。どうぞ、どなたでもご出席ください。